特集2

飯舘村の未来を育む 農地活用の新しい形

13区営農組合が耕作する飼料用米の水田の一部。

飯舘村の自慢の農業は、震災による中断で、培ってきた多くのものを失いました。また、表土のはぎ取りが行われた農地の再生、避難による担い手の大幅な減少など、長期的な課題にも直面することとなりました。しかし今、村内にはいきいきとした農の風景が、一歩また二歩と広がってきています。全村避難の期間から営農再開に向けて準備を進めてきた村と担い手の挑戦が、困難を打破しながら力強く歩みを進める中で、生まれくる景色の広がりです。

課題に向き合う中で、新しい形を取り入れながら、飯舘村の農業は、未来へつながる構想をもって前進を続けています。担い手の大いなる努力を機動力に、農地の持ち主をはじめとする多くの村民にも利をもたらし村全体を活性化する取り組みとして、農業の振興が行われています。

「農地中間管理事業」から生まれた農業の循環

フェリスラテ

堆肥の製造エリア。定期的に上下を返し、微生物による発酵を促します。

育成牧場で従業員と共に毎朝の作業を行う田中さん。

復興牧場『フェリスラテ』は、福島市の本場で約600頭の乳牛を飼養し生乳を出荷しています。代表取締役社長の田中一正さん（長泥）は、令和元年、村内に育成牧場を開場し、前出の『13区営農組合』が生産する飼料を買い取り、ホルスタインの仔牛の育成と和牛の繁殖を行っています。また、良質の堆肥を生産し、村や村内の農家に提供。堆肥は年間500t以上の生産量がありますが、この春は一時的に売り切れ状態にもなったそうです。同営農組合の細川代表とは旧知の仲という田中さん。「素晴らしい飼料をつくっていただいている。牛が喜んで食べるので、成牛がいる福島市の本場でも使っています。地場で安定的によいものが手に入ることは本当にありがたいです」。

13区営農組合

組合員が一丸となって技術を高め、広大な農地で作物を栽培しています。

約150haの農地で、飼料用米・WCS（ホールクロップサイレージ）・デントコーン・大豆（契約栽培）を生産する農事組合法人『13区営農組合』（細川強代表／上飯樋）。地域の担い手集団として平成29年から活動をスタートし、広大な農地にヒマワリを植え緑肥にするなど、いち早く営農再開に備えました。令和元年秋には、任意の団体を法人化。「農地中間管理事業」を先駆的に活用し、上飯樋地区（13区）を中心に集積した農地で、新たな農業の形をつくってきました。農地は数年内に200haまで広がる見込みで、「新たに作付けする作物の選定にも動いています」と細川さん。「この土地に合ったやり方で、地域の農地を守りながら、やりがいのある仕事を創っていきたい」。

今年から本格的に栽培が始まったデントコーンの畑。